

# 通信小海

## 脱ダム議論

牧師 水草修治

六月二十五日の県議会で田中知事の脱ダムにかんする答弁が、質問者への答えになっていないということで、議会による知事不信任案提出となりそうである。傍聴席の人々からは、子どものけんか以下、知事も議会も頭を冷やせ、金の無駄遣いだというような感想が出ていた。

ところで、日本の国土にこれ以上ダムを造る必要があるのかどうか。ダム建設推進派は、治水の観点から、洪水のときに水に浸るおそれがある一〇%の地域に国民の半分が住んでいて、そこに国民の財産の七五%が集まっているというような数字を挙げる。また

「今月のひとばし」

「主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに呼び求めよ。」イザヤ書五十五・六

利水の面からは雨が降っても滝のように流れ去ってしまう日本の川の性質から見て、雨のないときにこれを利用するために溜め込むダムが必要だという。

他方、脱ダム派は、推進派が将来使うと想定する水量が多すぎるなど計画がたらぬものであるとし、またダムは数十年たてば砂がたまって使用不能になる莫大な無駄遣いであると指摘する。代替案としては、水田を大切に、植林をしてダムの役割を果たさせ、川幅を広げ遊水地を造ることで洪水を防ぐことができるかと主張する。

総論を聞けば、それぞれに理がある。結局、各論としてこの川の場合はどうなのかという具体的な状況によりけりということになる。この際、自然の開発について聖書はなんといっているのか振り返ってみたい。

神は人を創造されたとき、「地に満ちよ。地を従えよ。」「地を耕し、守れ」とおっしゃ

日本同盟基督教団 小海キリスト教会 牧師 水草修治

会堂・牧師館 長野県南佐久郡小海町大字小海四三三五 二七

〒三八四一一 二二 二六七九二四七七六

郵便振替 五三 六一六八三

## 見晴台の教会へどうぞ

(小海駅東の丘の上)

地図

## 集会あんない

日曜日 サンデースクール 午前八時半

朝礼拝 午前十時から十一時

夕礼拝 午後七時半から八時半

水曜日 祈り会 午後一時半と午後七時半

第三金曜日 賛美歌と聖書に親しむ会

午後七時半

\*八千穂・海尻・川上でも家庭集会あり。

\*個人的な相談にも乗ります。

と聖書にある。墮落前、人は神のしもべとして謙虚に自然をうるわしく管理することができたが、神に背を向けて以来、人は自己中心的になり自然に対しては暴君的に振舞うようになってしまった。他方、自然も人間の墮落以来呪いを受けて、人間に反抗しるもろの災害をもたらすものとなってしまったと聖書は告げている。

では、墮落後の世界にあって私たちはいかに自然に処すべきか。人間としては、自然に対して暴君的な力をふるわぬように自己抑制しつつ世話をすると同時に、牙をむいた自然の暴威をコントロールするすべを持つことも必要なわけである。人は自分が神であるかのように思い上がってはいけないが、さりとて、ある人々のように人間は単なる自然界の一部だと主張することも幻想にすぎない。車に乗り、電気を使用し、テレビを見ながら、人間は自然の一部だといつても何の説得力もない。人には、創造主なる神のしもべとして、自然を謙遜な君主として世話し治める任務が与えられているのである。

アーキモチよかった たのしかった

## 福音指圧教室

日時 七月二十七日(土)

午前十時から十時半

\*お一人でのご参加も歓迎します。

六月の指圧教室にはもう一人の指圧の先生も飛び入りで参加してくださり、みなそれぞれに肩こりとひざの治療のための指圧をたのしく教えていただきました。感謝。

聖書からは、人の三重構造を学びました。

「平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエスキリストの再臨のとき、あなたがたの霊、たましい、からだに完全に守られますように。」テサロニケ前書五章二十三節

感謝！一ヶ月分お米がささげられました。 山谷支援

七月には備蓄米が底をつくと同書きました。その後一ヶ月分与えられ、八月までなんとかこたえられそうです。一回に約コメ二百キロを使います。さらにご協力ください。お願いします。

小諸の有志者が約千平米の畑を貸してくださいました。ここでは、四月に山谷での給食のためジャガイモ植付けがなされました。七月にはタマネギ収穫がボランティアと山谷の方たちで行われます。藤田さんは、山谷の人々の自立への助けを目指しています。

小海町役場 九二二二五二五

藤田寛 ヤマト運輸・台東支店止め(着店番号三一) 五クロネコ宅急便で

カンパ 千振替 二四 四・五三七九六 山谷農場

# 恥も外聞もなく

「イエスが、弟子たちや多くの群衆といっしょにエリコを出られると、バルテマイという盲人のこじぎが、道端にすわっていた。ところが、ナザレのイエスだと聞くと、「ダビデの子のイエス様。私をあわれんでください。」と叫び立てた。そこで、彼を黙らせようと、おおぜいでたしなめたが、彼はますます「ダビデの子よ。私をあわれんでください。」と叫びたてた。

するとイエスは立ち止まって、「あの人を呼んで来なさい。」と言われた。そこで彼らはその盲人を呼び、「心配しないでよい良い。さあ、立ちなさい。あなたをお呼びになつてゐる。」と言った。すると盲人は上着を脱ぎ捨て、すぐ立ち上がった。イエスのところにきた。

そこでイエスは、さらにこう言われた。「わたしに何をしてほしいのか。」すると

盲人は言った。「先生。目が見えるようになることです。」するとイエスは、彼に言われた。「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救つたのです。」すると、すぐさま彼は見えるようになり、イエスの行かれる所について行った。「マルコ福音書十章

エリコの町は城壁に囲まれていて、朝晩、門が開閉された。門前は人通りが多いので、物乞いたちの絶好のスポットになる。盲人バルテマイも毎日この門前にすわっていた。そんなある日、イエス様のうわさを聞いた。聞けば聞くほど、イエス様こそ救い主だとバルテマイは確信するようになった。だから彼は、もしイエス様が自分の前を通つたならば、なんとしてもイエス様に自分の目を治していただこうと腹を決めていたのである。

ついに、そのときが来た。バルテマイの耳にはがやがやと大勢の人々が前を通つていくことがわかる。その会話から、それがイエスの一行であるとわかった。ついに、イエスが来たのだ。ここぞをばかりに、バルテマイは声の限りに叫び立てる。

「ダビデの子よ。私をあわれんでください！」

ダビデの子よ。私をあわれんでください！  
ダビデの子よ。私をあわれんでください！  
馬鹿げたほどの大声を人々はとどめよつとするが、バルテマイは、恥も外聞もなく、叫びたてた。「ダビデの子よ。私をあわれんでください！」目の見えないバルテマイは、自分でイエス様のところまで走っていくこともできない。しかし、声があつた。そこでただ大声を出すことによって、イエス様に立ち止まり振り向いていただこうと決めたのである。実際、イエスは立ち止まり、振り向き、バルテマイをそばにお呼びになつた。

イエス様に救いを求めることにおいては誰に遠慮することもいらない。恥も外聞も面子もかなくすりすてることである。人がなんと言おうと、あなたの魂はあなたのものである。だれにも止める権利はない。

また、「忙しいから無理です。足がないから行けません。目が見えないから無理です。」という言い訳は意味がない。バルテマイは目が見えないけれど、大きな声が与えられていたので、これをもって主を呼び求め、主に振る向いていただいた。真剣に求める者に主は答えてくださる。

△幸福な家庭△

## 二つのボート？

梅雨が明ければ小海にも夏の観光シーズンがやってきました。松原湖もボート客がにぎわうでしょう。昔、友人たちと山中湖で二艘のボートに乗り分けて沖に出たことがありますが。二艘のボートでいっしょに、ぐるりと湖をまわろうとしたのですが、これが案外むずかしい。湖面をわたる風と波、ボートのこぎ手の力とくせがあつて、いつのまにかボートは離れ離れになってしまいます。ですから、気がつくたびに、進路の修正をし、速度も微調整し、速く行きすぎたほうは待っているといつぐあいです。オールを引き上げて一休みしていても、波と風はふたつのボートを離れ離れにしてしまいます。

「二つのボートのことを思つて、夫婦のありかたについて、なんだか考えさせられませんか。結婚したときは、いっしょに生きていこうと

決心したにもかかわらず、いつのまにか心と心が離れ離れになっているというようなことはないでしょうか。

それぞれに一生懸命であっても、ペースが違えば二人は離れ離れになってしまいます。相手のペースを考えなければなりません。一人で生きているのではないのです。

また、かりに方向がちがえば、それぞれが一生懸命漕げば漕ぐほど離れ離れになってしまいます。自分たちはどこに行こうとしているのか、なにが家庭において一番大切なことなのか、そういう基本的な価値観が一致していることがたいせつです。

また風や波が二つのボートを引き離してしまふように、この世の荒波が二人を引き離してしまふかもしれません。

このボートのたとえは夫婦が夫婦として歩むためには、やはり意識してそれなりの努力が必要だということを思い出させてくれるでしょう。

しかし、二人がそれぞれにボートに乗るといふ夫婦のたとえには、聖書から見て無理があるかもしれません。むしろ、結婚すると

いうことは、今まで親と一緒に乗ってきた男と女とが親のボートから、別の一つのボートに乗り移つて生活を始めることと考へたほうがよいかもしれません。その覚悟もなく、結婚後もそれぞれ自分のボートを漕いで生きていくというような考え方では、結婚生活がうまく行くことはむずかしいでしょう。親のボートに左足を夫婦のボートに右足をかけていたのでは、いずれ股裂きになつて湖にドボンと落ちてしまいます。

夫婦は結婚したとき、ともに喜びともに泣く運命共同体になつたのです。とはいへ、一つの小さなボートのなかですから、互いに協力し、互いを尊重し声掛け合つて生きることが、別々のボートに乗っているときよりももっと求められるでしょう。

「それゆへ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」

創世記二章

「だれでも、聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい。」

ヤコブ一：十九